

バチは高く、足は力強く、雷を起すように！

伊吹山山頂での雨乞いを今に伝える

〔米原市上野〕

村人全員が伊吹山山頂まで登って雨乞いをした。そんな歴史をもつのが、米原市上野の太鼓踊。一度途絶えたものの復活、現在は5年に1度行われている。守って、見せて、自ら楽しむ：そんな祭りの姿がある。

伊吹山をめざした上野の雨乞い

覚えておられるだろうか。みくろな126号の特集「湖北用水史」。湖北の人びとは田んぼの水を確保するため知恵を振り絞り、普請し、ときに争ってきた。それでも水を得られないとき、最後にできることは祈ることだっ



▲バチを高くあげ、雷を呼び起こす。上野の太鼓踊りならではのしぐさ

た。雨乞いのための踊りを捧げ祈った。祈願が通じて雨が降り豊作となれば、また感謝をこめ踊った。「うちの太鼓はバチを高く揚げ、足を力強く地に下ろす動作が特徴。雷を起こそうとする様子をあらわしているんですよ」と教えてくださったのは、上野住民の高橋順之さん。同市歴史文化財保護課職員で伊吹山や周辺の歴史文化に詳しい。

江戸時代から上野では長い日照りが続く、現在の伊吹山登山口にある三之宮神社に氏子が集結し、早朝から夜まで雨乞いをしたという。三日三夜、ときに七日七夜続け、それでも雨が降らないときは、村人全員が松明を点し伊吹山に登り、頂上の弥勒菩薩前に柴を積み上げ火を焚いて、太鼓や鉦を打ち鳴らしての「雷踊り」で雨を祈った。

17世紀末には行われていたとされ、大正13年まで続いていたものが断絶。しかし郷土芸能を伝承させようと全上野区民が加入しての伊吹山奉納太鼓踊保存会を組織し、昭和42年に豊作感謝のお礼の踊り「返礼踊り」として復活。以後5年に1度10月第1日曜日に三之



▲音頭を囲み円になって踊る

宮神社秋祭として開催されるようになった。

5年に1度だけだから、全部やる

米原市域、特に伊吹山麓には太鼓踊りを継承する集落が集中し、参加する人数が多いのがひとつの特徴でもある。似た傾向をもってはいるが各集落それぞれに「うちの太鼓踊りがイチバン」という自信と誇りがある。祭礼当日までは決して他の集落に見せないように非公開で練習をしたこともあるようだ。

踊りへの情熱は脈々と受け継がれている。戸数約190の上野では、一戸から1人、指導者・役員・踊り手・準備役のいずれかを担うことになっていて、昨年の祭礼での出場者

は約170人。太鼓(大人17人、中学生4人、小学生18人)、鉦(大人4人)、大松明(大人2人)、笛(大人10人、中学生3人、小学生11人)、音頭(大人16人)、側踊り(大人18人)、ふくべ振り(親方4人、幼児・小学生63人)である。

上野の特徴を尋ねると高橋さんは「長い」と笑う。まず奉納の前には出場者が隊列となつて上野会館から神社へ向かう「道行き」があり、わずか200mほどを1時間かけて向かう。雨乞いのために伊吹山に登る様子をあらわしたものだ。

その後午後1時から奉納が始まり、途中休憩をはさむものの午後4時ごろまで続く。ゆえに覚えなければならぬ曲や動きが多種ある。たとえば笛でも長浜曳山祭のシャギリの音色のような、京都の祇園祭のような調子のものがあり、当時の風流なども組み込まれていった。あれやこれやと取り入れてきた結果、現在の長い奉納になるのだ。

「5年に1度だけだからやっぱり全部やらんとということが続いてきたんです。きつと毎年やっていたら大変やし、という理由で簡略化していつて伝わるものも少なかったでしょうね」



▲腰を低く落として踊り続ける鉦

約3ヶ月、60回以上の練習

上野の人たちがこの踊りをいかに大切にしているか、それは本日を迎えるまでの数ヶ月でもよくわかる。6月に入ると週に3回午後7時半から9時まで、小中学生を対象に男子の太鼓と女子の笛の練習が会館で始まる。太鼓の子たちは、最初は床においた段ボールを太鼓に、竹の棒をバチに見立ててのリズムとりから始まる。実は、太鼓と笛は昨年小学校1、2年生からも参加できるようになった。これまで3年生以上が対象だったのだが、「年齢を引き下げること、子どもたちが祭りを経験できる機会を増やそう」との思いです。5年に1度だから次に出場する機会が中学生になってしまうと部活も忙しくなるし、思春期という年頃から積極的に参加してもらおうのが難しい。さらにその5年後は進学やらで地元になくなってしまおう」と高橋さん。この2学年からは10人が参加した。

夏休みに入ると大人もまじって、土日とお



▲段ボール箱を太鼓に見立てて練習する子どもたち



▲平日夜の指導者の確保も大変だが、地域が丸となって祭りに向かって練習する

⑧ 川合の太鼓踊り(寿踊り)

[県選択(平成1.3.31)]

○佐波加刀神社(長浜市木之本町川合)

◇8月18日

☆太鼓6人と鉦2人を中心にして灯明祭の日に奉納。太鼓は白の鉢巻き、シャツ、ステテコ、足袋に草履。3本の帯を垂らした帯台と短冊を飾った青竹を背負う。男子中高生が化粧して、女物の着物や帯をまとつのは川合独特。かつては「川合義会」という青年組織によっておこなわれ、寿踊り、富貴踊り、桜踊りがあった。10年ほど前に休止になって保存会ができたが、今のところ具体的な活動はない。



▲郷回りの太鼓踊り(1977年撮影)



▲千田の太鼓踊り(1977年撮影)

④丹生の茶わん祭→P25

⑥下余呉太鼓踊り→P13

⑦金居原太鼓踊り→P16



▲川合の太鼓踊り(1974年撮影)

⑨ 郷回りの太鼓踊り

○布施立石神社 阿加穂神社(長浜市木之本町赤尾)

◇8月第3日曜

☆露払い、陣笠、御幣、小太鼓、大太鼓、鉦、笛などが「郷回り」をおこなう。阿加穂神社、布施立石神社で奉納の後、隣村との境界など重要な箇所を練り回る。シャグマを戴いた小太鼓が、大太鼓の回りをまわりながら踊る。中断後、昭和45、6年ごろ復活したが、子どもが少なくなり、10年ほど前から、お宮さんなどへの参詣のみ継承している。

⑩ 千田の太鼓踊り

○石作玉作神社(長浜市木之本町千田)

◇8月16日

☆以前は、8月14日、湧出山中腹の古墳跡の台地(松明場)に白蒸しを持って上がり、お参りの人にふるまった。夕方以降、松明、提灯を手に山を下り、赤川を渡って参道へ。翌日、パンパで、シャグマをかぶった若者たちが円を描いて踊った。現在、踊りは休止中だが、笛、太鼓のみで行事は続いている。

⑪ 唐川の太鼓踊り(ゆるぎ太鼓踊り)

○日吉神社(長浜市高月町唐川)

◇8月14日(不定期)

☆直径1mほどもある大太鼓(親太鼓)に小太鼓、鉦、笛、ほら貝などが、集落裏の湧出山に上がる。頭上にはシャグマ。かつて下山の際に火を掲げたという。下山後も円陣を作って踊る。

昭和56年に中断後、平成7年に復活し、4、5年おきに平成23年ごろまで、おこなわれた。小太鼓担当の子どもがいなかったため今は休止中だが、できるときに開催される見通し。

湖北の郷土芸能を歩く

子どもからお年寄りまで、集落あげて賑わうハレの日。湖北各地で太鼓踊りや奴振りなどの個性豊かな芸能が繰り広げられます。

ここでは、今も継承されている郷土芸能だけでなく、昭和後期以降まで続けられていたものも紹介します。笛や太鼓、鉦の音とともにつかしい声も聞こえてきそうです。

*各行事の内容は、地元の方からの聞き取りと、調査報告書などの記載によるもので、現状とは異なる場合があります。
*開催日は、状況によって変更になる場合があります。

*アミかけ(グレーの文字)は取材時において休止中のもの
*見出しの数字はP8の地図とP9の表に対応しています。

凡例

(地図上の番号)名称[指定など]

○会場と所在地

◇日程(開催の場合)

☆内容

◎平成以降(1989~)の撮影

●昭和時代(~1988)の撮影



▲中河内太鼓踊り(1977年撮影)

① 中河内太鼓踊り [県指定(昭和61.3.28)]

○広峯神社(長浜市余呉町中河内)

◇8月16日

☆起源は不詳。踊り手は色とりどりの短冊を付けた高さ2mほどの竹を背負う。夕刻、お祓いの後、境内で踊り、その後、御旅所、再び境内にて踊る。



▲ちゃんちゃこ踊り(◎)

③ 国安の野神祭

○草岡神社(長浜市余呉町国安)

◇8月25日直近の土曜か日曜日

☆近郷の5郷(国安、池原、今市、東野、文室)から太鼓などを打ち鳴らしながら社参し、能登踊り、四宮踊りなどを奉納。五箇踊りといわれ、享保年間から伝わるとされる。平成28年は8月20日(土)におこなわれる。

⑤ 中之郷の相撲神事

○鉛線比古神社(長浜市余呉町中之郷)

◇8月24日

☆子どもによる奉納相撲。野神祭に奉納した古事を今に伝える行事。子どもの数が少なくなったなかで続けられている。

② ちゃんちゃこ踊り [県指定(昭和61.3.28)]

○下塩津神社(長浜市西浅井町集福寺)

◇8月16日(不定期)

☆鉦や太鼓の鳴り物の音から、ちゃんちゃこと呼ばれるといわれる。長刀、先箱、毛槍、立傘、鉦、神輿、太鼓、棒振り、音頭取り、花笠などの長い行列が、集落を練り歩いて神社へ向かう。途中の辻で、太鼓、鉦、棒振り各二人と、数人の花笠による踊りを披露。踊りは20曲が伝承されてきた。優雅な花笠の装束は、平安朝の女官の衣装から転化したものと伝わる。

集落では、毎年実施を検討しているが、総勢35人ほどの参加者が必要で、人数の確保がむずかしいのが実情とのこと。直近は平成25年におこなわれた。